

■基調講演概要

タイトル：「アメリカ・イン・ジャパン 1825-2025」

講演者：吉見 俊哉（東京大学 名誉教授、國學院大学 教授）

概要：

戦後 80 年、「アメリカ」は日本の大衆文化、社会意識、政治経済体制に深く浸透してきた。そしてこの期間を通じ、日本は世界で最も親米的な国の一つとなった。戦後日本のテレビ放送史も大衆文化史も、この日米の深い関係を根底から問い返すことなしには語れない。もちろん、そのための一つのエポックは 1945 年である。しかし、もう一つのエポックがある。1853 年、つまりペリー提督の率いる米艦隊が蒸気船を連れて東京湾まで遠征し、徳川幕府に開国を迫った時だ。それ以来、「黒船（蒸気船のこと）」は強力なアメリカからの圧力を指す慣用句となった。だが実は、ペリー来航にも先立つ四半世紀の歴史があり、日米関係史は幕府が異国船打ち払い令を出した 1825 年頃まで遡る。この頃から日本近海での太平洋捕鯨が活発化し、日本漁民とアメリカの捕鯨船が遭遇し始めていた。同時に米国内では「西部開拓」が急速に進み、アメリカ先住民が虐殺・排除され、1848 年、「開拓」はついにカリフォルニアまで達してゴールドラッシュとなる。その先に広がっていた「フロンティア」が太平洋である。この大きな歴史の見取図の中で日米関係史を捉え返すとき、「日本の中のアメリカ」がこれまで語られてきたのとは全く異なる相貌をもって浮上する。